

WELCOME
TO
KITA
MURA



北村の記憶

川といきる・村をひらく・農をおこす



明治29年の

「北海道地形図」を見ると

北村には

開墾予定地を示す

殖民区画の線が

入っていません。

この空白が物語るのは、

泥炭地ゆえ、

耕作に適さないと

みなされていたこと。

人々は、そんな土地を、

不屈の闘志で

実り豊かな農地に

変えました。

その軌跡を

ひも解いていきましょう。



北村の記憶

川といきる・村をひらく・農をおこす

INDEX

未来を拓くスマート農業

川といきる

- 太古からあった北村の暮らし 文・写真／杉浦章一郎（郷土史を学ぶ会）..... 6
1. 「北海道の名付け親」とされる松浦武四郎が江戸時代末期に3回も宿営 8
 2. 石狩川を交通路に使えることで選ばれた、北海道初の集治監「樺戸集治監」... 10
 3. 明治から昭和初期まで外輪船が行き交っていた石狩川航路 12
 4. 石狩川の水害に苦しみ続けた北村の歴史 昭和初期に11カ所もの捷水路工事 14
 5. 石狩川流域を洪水から守る 北海道最大の北村遊水地 18

村をひらく

1. 北村開拓の先駆者たちは肥沃な自然堤防を利用 22
2. 北海道開拓にロマンを追い求め、北村の礎を築いた北村雄治 24
3. 北村雄治を北海道開拓へ導いた人々 26
4. 明治33年、北村誕生 名の由来は「北村雄治」にあり 28
5. 兄・雄治の遺志を継ぎ村づくりに奮闘した北村颯 30
6. デンマーク農法を志向し、空知地方にホルスタイン種を導入した北村謹 32
7. 泥炭地に阻まれ、長年月かかった道路交通の整備 34

農をおこす

1. 全面積の77%が泥炭地 マイナスを克服し、実りの大地に 36
 2. 開拓者たちの「米を作りたい」という強い思い 稲は、水害に強い作物でもあった 38
 3. 米作りに必須の水を、どう得るか 空知を潤す用水路ができるまで 40
 4. 低コストの農業経営を実現するために、水田を近代的に整備 42
 5. 連作障害を防ぎ、土壌を豊かにする「空知型輪作」 44
 6. 落花生、白菜、ショウガ、バジル……北村の元気を生み出す野菜たち 46
- 里地という宇宙に抱かれて 文・写真／牛山克巳（宮島沼水鳥・湿地センター）..... 48

未来を拓くスマート農業

「最初はね、『ロボットに何ができるのさ』って、思った。でも、一緒に仕事してみても、けなげに働くイイ奴だなんて思えてきたのさ」。こう話すのは、いわみざわ地域ICT農業利活用研究会前会長の西谷内智治にしやうちじはるさんです。

ロボットトラクタにはレベル1からレベル3があります。

【レベル1】人が乗っていて自動で操縦してくれる。

【レベル2】1台にのみ人が乗り、残りの複数台が

圃場内で無人運転できる。

【レベル3】遠隔監視で公道を走り、圃場から

圃場へと移動し、農作業を行える。

現在、ロボットトラクタは、【レベル2】まで進化しています。人工衛星を使った測位システムで自分の位置を正確に知り、さまざまな作業を無人で行えるようになりました。衛星による測位情報は、岩見沢市が設けた基地局による補正で、誤差がわずか2〜3cmという高精度に達しています。

このSFのような光景は、平成25年（2013）、西谷内さんから農家がICT（情報通信技術）を農業に活用するいわみざわ地域ICT農業利活用研究会を、い





日本版GPSともいえる準天頂衛星「みちびき」。
スマート農業になくてはならない存在だ。
画像提供= JAXA

ち早く立ち上げたことから始まります。そこに岩見沢市と北海道大学、JAが合流し、産官学の連携ができました。農業ロボット研究で世界をリードする北海道大学大学院農学研究院副研究院長・教授の野口伸のほろさんはこう語ります。「近年は担い手不足解消のため、農地を集約して大規模化し、農業機械が大型化しています。しかし大型化は限界にきています。自重で土を踏み固めてしまうと、高額で農家の負担も大きいからです。ならば50馬力の小型トラクタが4台で仕事をすれば200馬力になると考えました。そこで重要なのが、複数のロボットトラクタが協調して動く技術です。これは世界初の技術なのです」。

現在、岩見沢市、北海道大学、NTTグループは、2019年に締結した「最先端の農業ロボット技術と情報通信技術の活用による世界トップレベルのスマート農業およびサステイナブルなスマートアグリシティの実現に向けた産官学連携協定」のもと、5Gを活用したスマートロボットの最新技術の研究開発と実証を行っています。スマート農業とは、ロボット技術やICTを



無人で防除作業してます

無人でハンドルが動く、ロボットトラクタの操縦席(右)。写真提供=野口伸





【レベル3】が実現すれば、農家の車庫を出たロボットトラクタが、無人で公道を走って圃場にやって来て、作業をして、車庫に帰ってくることになる。北村は、そんな未来を拓く研究のフィールドだ(写真はロボットトラクタではありません)。写真提供=国土交通省北海道開発局札幌開発建設部

活用して、省力化・精密化や高品質生産を実現する新たな農業のこと。そしてスマートアグリシティとは、暮らしやすい、産業振興、防災・防犯などに貢献する通信基盤が整った地域のことです。北村は、世界最先端の実証実験のフィールドなのです。西谷内さんも、担い手のいなくなった農地を引き受けてきましたが、両親が引退し、繁忙期には手が回らないと感じることも。「スマート農業では、農家の奥さんのように、操縦に慣れていない人でもトラクタで作業できるし、高齢者は操縦で疲れずにすむという声を聞きますね。防除、除草、追肥などを自動で行い、衛星やドローン画像から作物の生育状況をセンシングして生育の劣っているところに効率的に肥料をまくことも可能なんです」と、西谷内さんは語ります。

野口さんいわく「農林水産省と総務省の事業でローカル5Gによる地域課題の解決に向けた取り組みも実施しています。5G、AI、IoTなどを利用することで農業にイノベーションを起こすこと、さらに日本にとどまらず、世界の食料問題に貢献することを目指しています」。

健やかな農業が営まれ続け、農地が継承されていくために、北村から未来が拓かれていきます。



川といきる



石狩川が運んだ土が、北村の大地の土台です。
暮らしの足跡は、
縄文時代中期にまで遡ることができます。
毎年のように襲いかかる水害を克服し、
現在も過去も未来も、
北村は川と共に生きています。



太古からあった

北村の暮らし



文・写真／杉浦章一郎（郷土史を学ぶ会）

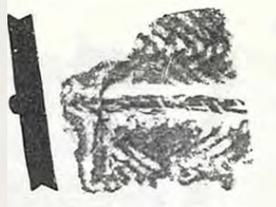
北村最古の土器

石狩平野のほぼ中央に位置する北村では、いつ頃から人類の生活が始まったのでしょうか。手がかりとなるのが土器や石器のような考古資料です。北村の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）は8カ所あり、多くは、石狩川やその支流の川岸に形成された自然堤防（※1）の上に立地しています。自然堤防は周囲より少しだけ高くなっているため、縄文時代から人々の暮らしの場として利用されてきたのです。

北村で発見された多くの考古資料は、発掘調査ではなく耕作中などに見つかったものです。その中で最も古い土器は、縄文時代中期後半に位置づけられます。この土器は、道央部に分布し、赤川・北都・幌達布でも確認されています。今から5,000年ほど前のものとみられ、人々はこの時期から北村の地に住み始めたのでしょうか。

今も地中にのこる砂浜遺跡

現在、三日月湖となっている旧石狩川の左岸に砂浜遺跡が存在します。1982年、道営圃場整備事業に伴う



北村北都で発見された縄文時代中期後半の土器

（※1）自然堤防とは、洪水時に川から水と一緒にあふれ出た土砂が、何度も川岸に堆積してできた地形。周辺と比べて土地が高くなっているため、洪水時も比較的安全で肥沃でもあるため、北海道開拓期にも自然堤防の上に村落や耕地が開かれた。



1



「北海道の名付け親」とされる松浦武四郎が 江戸時代末期に3回も宿営

江戸
明治



大正

昭和

平成

令和

松浦武四郎は、江戸時代末期に蝦夷地を踏査し、数多くの書物や詳細な地図を残した人物です。明治2年（1869）、「蝦夷地」に代わる名を6案、明治政府へ提案し、政府はそこから「北加伊道」を選んで「北海道」としました。そのため「北海道の名付け親」として有名ですが、北村のニイルヲマナイで3回も宿営したことは意外と知られていません。

武四郎の蝦夷地探査は弘化2年（1845）以来、6回にも及びます。それ以前にも伊能忠敬、間宮林蔵らの測量による『大日本沿海実測図』の蝦夷全図によって海岸線はほぼ正確に描かれていましたが、内陸部は未知の状態でした。武四郎は石狩川や天塩川を遡ることで内陸部の奥深くに踏み込み、『東西蝦夷山川地理取調図』の基本となる調査を行ったのです。同図には約9800ものアイヌ語地名が収録され、後の北海道の地名のともになりました。



松浦武四郎(1818~1888)
松浦武四郎記念館所蔵

安政3年（1856）は、ホロムイ（岩見沢市幌向）からシベツフト（月形町）に至る間のニイルヲマナイでの宿泊についてこう記しています。「傍らに小川がある。今日の道を尋ねると、対雁ついでりから13里だという。まだ晩飯もできないうちに太陽が西山に沈んだが、9日の月は早くも天に昇って胡沙こさ深き空と



武四郎は蝦夷地の自然やアイヌの暮らし、松前藩による支配の実態などを調べて多くの出版物を出した。上はアイヌの人々に案内と漕ぎ手を任せて、石狩川を遡る武四郎が描かれた『丁巳(ていし)石狩日誌』。札幌市中央図書館所蔵

はいえ隅々まで照らした。晩飯で酒を少しずつ与えると、アイヌらは山芹菜を折り敷いてその上に懇懇に座り、礼儀を尽くし、第一番にエンリシウ、二番にトミハセの順に座りいかにも楽しんで夜が更けるまで話していた。

安政4年は5月19日から石狩川を遡って20日にニイルロマナイを経て、23日に雨竜川河口に至る行程をまとめた記述があります。

安政5年の探査では、2月26日から27日までニイルロマナイで一泊しました。ニイルロマナイは、近くに舟が入れる良い港があり、また、石狩川河口からの探査の行程において、日数的にもちょうど良い地点だったようです。

同じ場所を3回も宿泊地としたのは、蝦夷地広しといえどもニイルロマナイだけです。北村は、武四郎の案内をしたアイヌにとつて、ベースキャンプのような重要な場所だったことがわかります。

北村は、松浦武四郎の蝦夷地踏査でベースキャンプにされたほど、重要な場所でした。





2



江戸
明治

大正
昭和

平成

令和

石狩川を交通路に使えることで選ばれた、 北海道初の集治監「樺戸集治監」

集治監^{しゅうちかん}とは刑務所のことです。明治時代初期、身分を失った旧士族などの政治犯が増え、政府は彼らを開墾や鉦山の労働力として使役することになりました。

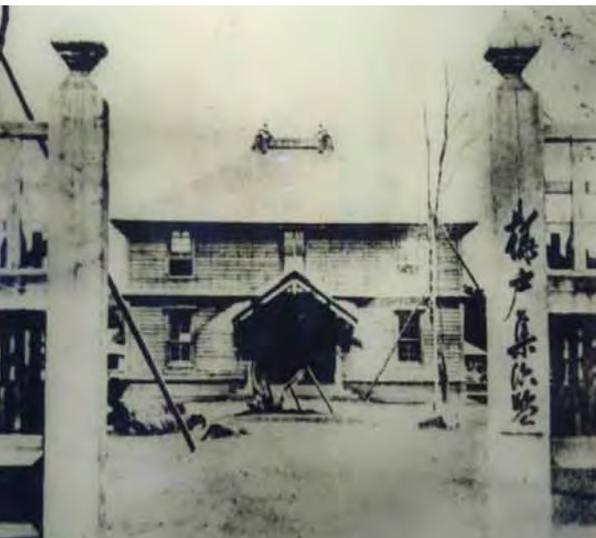
とはいえ、当時の北海道に交通路は整備されていません。集治監の適地を調査した月形^{つきがたけよし}潔は、物資運搬に石狩川の舟運が使える樺戸^{かばと}郡須倍^{すべつがと}都太^と（現・月形町）を選び、明治14年（1881）に樺戸集治監が開かれました。月形は初代の典獄^{てんごく}（所長）となりました。

明治15年には空知集治監（現・三笠市）が開かれ、囚人は幌内炭鉱での採掘に使役されました。釧路集治監（現・標茶町）、釧路集治監網走外役所（現・網走市）、北海道集治監十勝分監（現・帯広市）と続き、明治26年、道内集治監の囚人数は7000人を超えました。

樺戸集治監の囚人労働は石狩川の水路整備から始まりました。水中の流木を除去したり、暗礁の場所に四斗樽を浮かべたりして船が



↑月形潔(1847~1894)。
月形樺戸博物館所蔵
←樺戸集治監は、宮城、東京に次ぐ日本で3番目、北海道初の集治監。写真は明治15年頃月形樺戸博物館所蔵





赤い獄衣の囚人が描かれている月形（現・美幌市）間の道路開削工事（明治20年）。泥炭地の難工事には排水溝が必要で、重罪犯を示す赤い獄衣から「アカンボ」の呼称がついた囚人の手による排水溝は「アカンボ排水」と呼ばれた。月形樺戸博物館所蔵

安全に航行できるようにしました。作業中に誤って溺死する囚人もいましたが、囚人使役の基本は「生命の危険を考慮せず重労働に使える。死亡しても監獄費の節約になる」（内閣大書記官・金子堅太郎^{かねこけんたろう}）という、現代では考えられない非人間的な思想でした。

北海道中央道路（岩見沢〜旭川〜網走間）の建設では、樺戸・空知・網走の囚人が使役され、過酷な労働、劣悪な医療・衛生条件によって数カ月で200人以上の死者が出ました。当時の道路の半分は囚人労働によるもので、特に樺戸道路（峰延〜月形間）の敷設は、湿地の両側に排水溝を掘ることから始まる難工事でした。排水溝は舟で物資を運ぶことに利用しました。排水によって少し乾くと、丸太を置いて土をかけ、その上にまた丸太と土、さらに砂利などを敷くという、途方もない手間でした。開拓の最前線とされる屯田兵の兵屋も、実は囚人が1100戸以上を建設しました。

囚人の多くは政治犯。石狩川の航路を整備し、道路を開き、鉱山で石炭を掘り、開拓の最前線を担いました。





3



明治

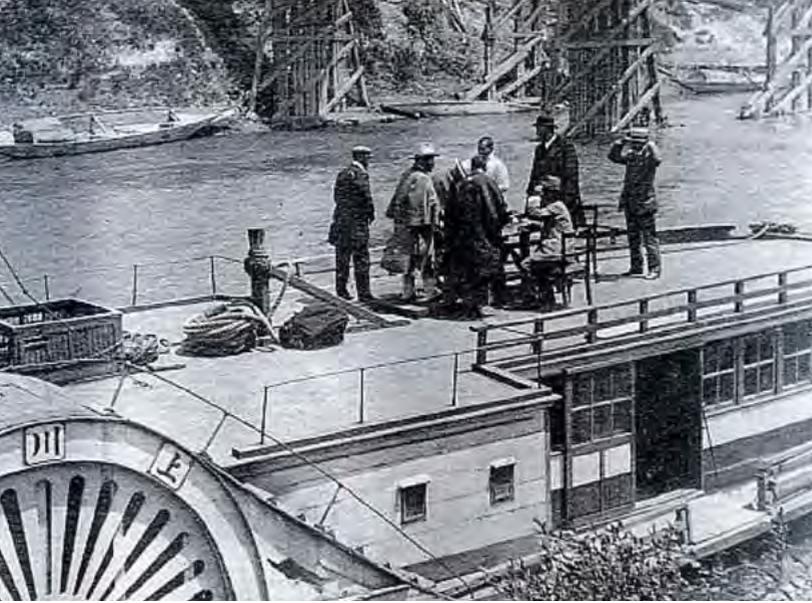
大正

昭和



平成

令和



漫画「ゴールデンカムイ」にも登場した上川丸。江別市教育委員会郷土資料館所蔵

明治から昭和初期まで 外輪船が行き交っていた石狩川航路

満々と水を湛えた川をゆうゆうと進む外輪船。船のデッキには山高帽の紳士の姿も見えます。この外国のような情景が、昭和初期までの北村ではごくありふれた日常のひとつコマでした。なんてハイカラなことでしょう。

写真の船は上川丸という外輪船です。外輪船は、船体中央部の両側にある水車を回して航行し、底が浅く平らなため、水中の流木などによってスクリューが損傷することがありません。気品ある白亜の姿は「石狩川の白鳥」と呼ばれたとか。

江戸時代以前から街道や宿場町があった本州以南と違い、北海道の交通インフラが本格的に整備され始めたのは、明治時代から。川を道としてそのまま交通路にできる舟運は大きな力でした。石狩川は勾配が緩く、水深があって大型船が航行できるという好条件もありました。

石狩川航路の始まりは、明治5年（1872）。開拓使が導入



上川丸は明治22年竣工。長さ23m、幅4m、60 t、速力時速15km、60名収容で、昭和8年まで活躍した。
国土交通省北海道開発局所蔵

した蒸気船・石明丸と風帆船・安渡丸で、石狩と樺戸を結び、樺戸集治監を建設する資材を運びました。明治24年には空知太(現・砂川市)まで延長され、江別―漁太間の新航路も開かれました。北村の寄港地は、幌向、美唄達布、美唄、狐森。美唄達布―狐森間は5里の間に3つも寄港地があり、これほど密にあるのは北村だけです。

石狩川航路の運航はさまざまな民間会社が担っていましたが、浅瀬や流木などによる座礁や、濁水・洪水による欠航、利用者の減少などで、経営状態は厳しく、明治35年には、国が補助金を交付して運航区間や回数、寄港地を指定する「命令航路」に指定されました。

やがて道路や鉄道が整備されるにつれ舟運は衰退し、昭和10年(1935)年、国鉄札沼線(現・JR学園都市線)の開通で石狩川航路は廃止となりましたが、開拓の歴史に大きな役割を果たしました。

川の道のメインストリートにあった北村。多くの寄港地が設けられ、人や物資が運ばれました。





4



明治
大正
昭和
平成
令和

石狩川の水害に苦しみ続けた北村の歴史 昭和初期に11カ所もの捷水路工事

石狩川は北村付近を蛇行しながら流れるため、水があふれやすく、北村は水害に苦しみ続けてきました。アイヌ語で「屈曲した内側の土地」を意味する「タップ」が、幌布や大達布の由来であることから、古来より蛇行していたことがわかります。

明治31年（1898）9月の豪雨による氾濫では、石狩平野全域で死者112名、浸水面積は4万1000町歩、被災家屋1万9000戸という、現在に至るまでで最も悲惨な被害が出ました。10月、北海道治水調査会が設置され、道庁技師の廣井勇（後の東京帝国大学教授）、その教え子の岡崎文吉、田辺朔郎（琵琶湖疎水の担当者。後の京都帝国大学教授）が名を連ね、6年間の予定で河川の測量、流量、氾濫面積など科学的な調査が始まりました。

北村を襲った主な水害

〔北村史上巻〕「北村百年史」より

- 明治12 豪雨による大出水
- 明治15 石狩川大氾濫。ヒバイタップの自然切断始まる
- 明治16 洪水によりヒバイタップが自然切断し中島ができる
- 明治22 融雪による石狩川大氾濫、2回
- 明治24 融雪による氾濫
- 明治30 豪雨による水害で前田農場が全戸転出
- 明治31 融雪による氾濫。9月には豪雨による氾濫。死者112名、浸水面積は4万1000町歩、被災家屋1万9000戸に及び、石狩川治水が始まる
- 明治34 石狩川氾濫で収穫皆無
- 明治37 石狩川氾濫で畑作全滅、稲は助かる
- 明治39 洪水により大達布の自然切断始まる
- 明治41 融雪による氾濫
- 明治42 融雪による氾濫
- 明治44 豪雨による大出水
- 明治44 洪水により大達布が自然切断し袋達布となる
- 明治45 融雪による氾濫
- 大正4 豪雨で石狩川大洪水
- 大正5 豪雨で石狩川、美唄川氾濫
- 大正7 台風により出水
- 大正8 豪雨で氾濫（5月、7月）





昭和56年(1981)、8月3~5日の豪雨により、大水害を被った北村。

- 大正 9 豪雨で石狩川氾濫。地上で水深4尺になる
- 大正 10 融雪による氾濫(4月、5月)
- 大正 11 融雪と台風による氾濫
- 大正 12 暴風雨で氾濫
- 大正 15 融雪と大雨で大洪水
- 昭和 2 大雨で空知川、歌志内川が氾濫
- 昭和 4 融雪による洪水
- 昭和 5 長雨で美唄川が氾濫、2回
- 昭和 6 融雪と長雨による洪水、5回(2~5月)
- 昭和 7 **8~9月で7回の浸水。滞水1カ月に及ぶ**
- 昭和 8 5月融雪による氾濫
- 昭和 9 出水2回(4月、5月)
- 昭和 10 出水(8月)
- 昭和 11 出水(10月)
- 昭和 12 出水(5月、7月)
- 昭和 14 融雪(4月)と豪雨(9月)による出水
- 昭和 15 4月融雪による出水
- 昭和 17 4月融雪による出水、9月石狩川氾濫
- 昭和 18 4月融雪による出水、9月石狩川氾濫
- 昭和 21 3月融雪による出水、7月豪雨による氾濫
- 昭和 25 5月融雪による出水、7・8月豪雨による水害
- 昭和 30 3月融雪による出水、豪雨による水害
- 昭和 31 4月融雪による出水、暴風雨による水害
- 昭和 33 7月台風による出水
- 昭和 34 9月台風による洪水
- 昭和 36 豪雨による大洪水
- 昭和 37 台風で北村始まって以来の大水害
- 昭和 39 融雪と豪雨による水害
- 昭和 40 台風による水害
- 昭和 45 融雪と台風による水害
- 昭和 50 台風で石狩川築堤決壊、氾濫
- 昭和 56 **豪雨による戦後最大の水害**





北村の惨状を伝える、昭和7年9月15日の北海タイムス記事

水害は生命の危機であり、田畑、家畜、家屋を流失させ、腸チフスなど疾病も発生させます。調査完了までとても待てない北村の農民は、砂浜から狐森までの約12 kmを自費で築堤しました。すると対岸の新篠津で被害が悪化し、新篠津は北村より高い堤防を約22 kmにわたり築きます。すると今度は翌春の融雪洪水で北村に浸水被害が出たため、若者数十名が新篠津へ船で乗り込んで堤防を破壊。こうした対立に北海道庁は、両岸の堤防を違法として取り壊し命令を出しました。この事件は、治水が生きるための切実な基盤であることを物語っています。

明治42年、岡崎文吉が10年間に及ぶ調査結果を「石狩川治水計画調査報文」にまとめました。その方針は、従来の河道を生かし、溢れた川水を新たに設ける「放水路」に流すというもの。岡崎は「手を加えていない自然の河川は理想的な姿である。自然が大部分な河川に対しては、できるだけ現状を維持し、たまたま存在する不良な一部分に対してのみ、自然の実例に鑑みて、これを改修する。これを自然主義と名付ける」と記しています。岡崎は、川の流れを近代科学の手法で徹底的に観察した結果、自然の摂理に添うことが最も合理的だという結論に至ったのです。この「放水路」方式で進むかに見えた工事ですが、在来水路と放水路の両方に堤防が必要で経費負担が大きいため、「捷水路」方式に変更されます。川の流れが蛇行

しないように、水路を掘って直線的な川に変えることでした。そのことにより、洪水を速やかに海に流そうと考えたのです。

北村関係の捷水路工事は昭和10年に始まり、豊ヶ丘、下達布、砂浜、巴農場、穴栗、幌達布、川上、枯木、上新篠津、狐森、大曲の11カ所。石狩川は開拓期以降、約74・3kmも短くなりましたが、工事による短絡は58・1km。うち北村の11カ所で計15・1kmもショートカットされましたから、北村における工事が大きな比率を占めていることがわかります。工事には表土を開削するエキスカベータをはじめ、最新鋭の機器が導入され、工事資材の製造や機械補修を行う治水工場が昭和9年、砂浜に設置されています。

捷水路は川の流れを速くし水位を下げ、周囲の地下水位も低下させました。すると泥炭地の乾燥化が進み、後年、空知が大穀倉地帯になる礎ともなったのでした。

捷水路工事による石狩川のショートカットは58・1km。うち15・1kmが北村沿岸で行われました。また、捷水路は泥炭地の乾燥化も進めました。

自然から学んだ科学で、治水に貢献した岡崎文吉



岡崎 文吉

治水計画では、洪水の流量計算が必要だ。札幌農学校出身の岡崎文吉は明治37年7月に発生した洪水の観測結果から、独自の計算方法を用いて、氾濫原への氾濫がないものと仮定した石狩川対雁地点における洪水流量を8350m³/秒と算出。石狩川の治水計画の基本として昭和40年まで、60年間も用いられた。これも岡崎が自然から学んだ成果である。岡崎の自然主義は、自然に逆らうことなく、自然と寄り添うもの。この考え方が生かされた工法が、ミシシッピー川の護岸ブロックで、コンクリートブロックに穴を開けてワイヤーを通し、すだれ状に編んだものだ。流水の影響で河岸が浸食されても、その形状に合わせてブロック全体が追従して河岸を守る。これは岡崎式ブロックと称された。





5

石狩川流域を洪水から守る 北海道最大の北村遊水地

明治

大正

昭和

平成

令和

今、北村では北村遊水地を造成する大工事が行われています。雁里、豊里、北都、中央地区にまたがる広さ950haという、道内最大の遊水地です。洪水時に石狩川の水を最大4,200万 m^3 貯水して、石狩川の水害から守るのです。4,200万 m^3 といってもピンときませんが、札幌ドームを約27個も満杯にする量です。

石狩川の流域は人口が多く、市街地が広がっていて、北海道の社会、経済の中心です。また、広大な田園は、日本の食料供給基地となっています。ここで洪水が起きると甚大な浸水被害を生じる恐れがあります。そのため河道整備や支川の洪水調節施設と合わせて遊水地を整備して、戦後最大規模を記録した昭和56年8月の洪水流量でも、流域の安全が保てることを目標にしています。

では、遊水地はどのように機能するのでしょうか。まず、大雨によって石狩川が増水すると、越流堤を越えて川の水が遊水地に流れ込みます。こうして遊水地に一時的に水が貯められることで、石狩川を流れる水の量を



普段は、農地として利用できる。

大雨が降ると、石狩川の水位が上がると越流堤を越えて、川の水が遊水地に入ってくる。遊水地に貯めることで、石狩川を流れる水の量を減らし水位を低下させる。

石狩川の水位が下がり始めると排水門を開けて、遊水地に貯まった水を石狩川に流す。

画像提供＝国土交通省北海道開発局札幌開発建設部



北村遊水地(赤で囲んだ部分)は流域の市街地や農地を洪水から守る。

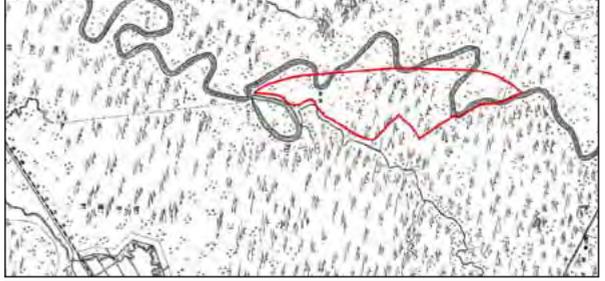
減らし、水位を下げる事ができます。そして洪水が収まり、石狩川の水位が下がり始めると、下流側に設けた排水門を開けて、遊水地に貯まった水を石狩川に流すのです。

遊水地内に水を貯めておくために、周囲堤約5.4kmと、石狩川および旧美唄川堤防にかさ上げした囲ぎょう堤約12・2kmが新たに造られます。ここで気になるのは北村には泥炭地の軟弱地盤が広く分布していますから、その上に重たい堤防を造ると、堤防の重さで沈下するのではないかということ。それを防ぐための工法が、真空圧密工法です。スポンジのような泥炭地から地盤内の水を吸い上げて排出し、排出された水の分だけ地盤を沈下させ、地盤強度を増加させるといふものです。

遊水地造成のため、予定地内に住んでおられた農家をはじめ、寺や神社も移転し、開拓期以来の暮らしの足跡をとどめるものはなくなりましたが、大部分の農



明治29年



明治44年



昭和10年



平成14年



北村遊水地予定地の歴史を振り返ると、石狩川の変化と土地利用の歩みが見てとれる。画像提供＝国土交通省北海道開発局札幌開発建設部

地の所有権は変わりません。大洪水が発生した時に「水を貯めさせてもらおう」権利として、国が地役権を設定することにより、現状の土地利用を継続できるようにします。人々が苦酷な水害と闘いながら、泥炭地に排水溝を手掘りし、客土によって作り上げた豊かな農地では、今後も地域の安全を守りつつ耕作が続けられていきます。

戦後最大規模の56水害の洪水流量に備える北村遊水地。ここは優良な農地として利用されてきたことから、土地の所有権を変更せず、地役権を設定することで、農業が継続されていきます。



村をひらく

太古から続く石狩川の流れがつくった自然堤防で、
明治時代に北村の農業が始まりました。

「北村」の名は、北村農場を創設した、
北村雄治に由来します。

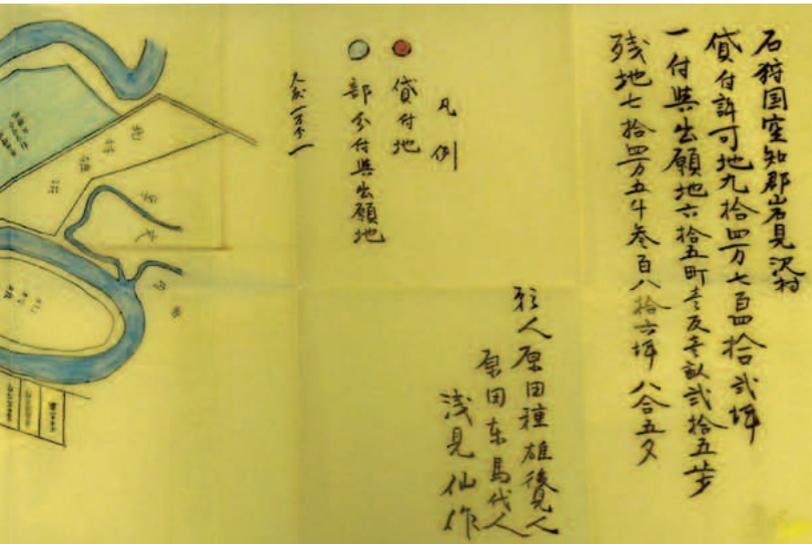
雄治と、その弟の颯、謹は、
先進的な取り組みを次々と行い、未来への種を蒔きました。





北村開拓の先駆者たちは 肥沃な自然堤防を利用

明治14年（1881）に樺戸集治監が開庁し、凶徒によって峰延道路がつくられました。峰延道路の南側は下ビバイ原野と呼ばれ、市来知村（現・三笠市）に置かれた空知集治監の農業用地でした。その約8割は泥炭地で、道庁が開墾予定地とする殖民区画の対象からはずされていました。しかし、石狩川が洪水時に運んだ土砂の堆積によってできた高い土地（＝自然堤防p6脚注参照）は肥沃で、周囲より高く洪水時にも比較的安全だったため、樺戸集治監の見張り員が生活の場になりました。その一人、滝本嘉助はビバイタツプに定住して、見張りをしながら、サケやマス、シカやクマを獲り、自家用の野菜を作りました。さらに対岸から常盤スカが移転し、明治22年には白鳥千代吉が土地貸下を受けました。



ホロタツプには、明治18年に石田文太郎（富山県出身）が最初に入地しました。砂浜には明治22年、奈良八太郎（青森県出身）が家族と共に篠路村から移住。同じ頃、白鳥栄吉も入地し、続いて山本常七（広島県出身）、今村仁太郎（富山県出身）が砂浜で農業を始めました。

最初に農場を作ろうとしたのは、原田東馬（東京出身）です。明治24年、息子の名義で「原田種雄農場」の貸下げを受けましたが、小作人の応募が少なく、明治33年に農場は解散します。農場解散によって分地小作契約を結んでいた人々は自作農となり、ホロタツプから砂浜に定住しました。

これより先の明治27年、原田が返地した岩見沢村狐森の土地を手に入れたのが、北村雄治です。

ビバイタツプに定住した樺戸集治監の見張り人・滝本嘉助を皮切りに、ホロタツプや砂浜でも農業が始まりました。



原田農場全体配置図(明治30年9月30日第1回部分付与出願添付図)。石狩川の自然堤防に農場が開かれた。





北海道開拓にロマンを追い求め、 北村の礎を築いた北村雄治

北村の歴史において、北村雄治、暱、謹の3兄弟は、大きな役割を果たしました。

北村雄治は、明治4年（1871年）山梨県中巨摩郡鏡中条村（現・南アルプス市）に生まれ、満15歳の時に父がコレラを患い急逝したため、家業の酒造業を継ぎます。優れた酒を造ろうと、酒づくりの本場・灘（現・兵庫県神戸市、



北村雄治(1871~1903)

芦屋市、西宮市)まで出向いて研究しましたが、酒造施設が2年続きで火災に遭う不運に。19歳と20歳の時のことでした。雄治は悩み苦しんだ末、一つの結論に至ります。「浮雲のような財産を残すことよりも、いやしくも生を天に受けたからには、生き甲斐のある人生を送り、有意義な事業をなして世の中をうるおし、国に奉公しなければならぬ。この際、家業をどうするかを検討して、一大決心をしなければならぬ」と。漢学の師である芳野世経を通して会った東京府知事の富田鉄之助から「今、我が国では北の大地の開發が急務である。人と金を待ちわびている。開拓にふさわしい土地を得て、北海道開拓の大事業を行うのが何よりだ」と言われます。そして雄治を北海道庁長官への着任を控える北垣国道(元・京都府知事)に引き合わせました。この出会いが、20歳の雄治に北海道開拓を決意させました。



明治26年(1893)10月9日の「山梨日日新聞」第5631号附録。「我が北海道は、農を以て立つ我日本帝国の基礎なりと云うべきなり」と、小作人を募った。

(中略) 今こそ多くの人がこの北海道をすぐれた玉であることを認め、美しい光を輝かす時である」。

明治26年、道庁から肥沃な土地柄と紹介された岩見沢村狐森を現地調査して移住先に決めました。そして明治27年、募集に応じた山梨県の小作人たちとともに、開拓の第一歩を踏み出したのです。

開拓は苛酷の極みでした。寒さに耐え、疲れた体に鞭打って、鬱蒼とした原生林を伐り開いていきました。石狩川のたび重なる氾濫にも打ちのめされましたが、決して諦めませんでした。さらに雄治は、山梨県出身者からなる実業家のネットワーク(「甲州財閥」^{p27参照})に加わり、鉄道会社や電灯会社の経営、株式売買で得た利益を農場経営につき込みました。

激務が崇^たつたのか、雄治は結核に侵されてしまいます。闘病中も米国製揚水機を鏡沼に据え付け、水田耕作を試みる先進的な取り組みを行いました。しかし明治36年、32歳の若さで世を去りました。

雄治はこんな言葉を残しています。「美しい玉である北海道は、これまで単なる石として見捨てられてきたが、玉はどうあっても玉であり、私はその価値を見出した。北海道は日本における宝の倉庫であると断言する。

雄治は北村農場を開き、先進的な取り組みを行い、将来は小作人に土地を譲渡する遺言を残して、32歳で世を去りました。

村





3



明治



大正

昭和

平成

令和

北村雄治を北海道開拓へ導いた人々

★雄治に東京府知事・富田鉄之助を紹介する
芳野のつぐね
(1860 - 1927)

父の金陵は江戸幕府の学問所である昌平黉の教授。明治維新後、父の私塾蓬原堂を継承し、ここに寄宿した雄治を指導した。世経は政治家に転身し、東京府会議長を経て、明治23年(1890)の第1回総選挙に当選して、衆議院議員を1期務めた。



★雄治に北海道庁長官・北垣国道を紹介するとみたてつづける
富田鉄之助
(1835 - 1916)

仙台藩士の子で、勝海舟の水解毒、福沢諭吉の慶応義塾に学び、アメリカ留学を経験する。明治維新後は、外交官、日本

銀行の第2代総裁を歴任。雄治が出会った明治25年は東京府知事を務めていて、翌年に退官してからは実業家として活躍。雄治は、明治29年正月、年始回りを「富田邸」から始めている。

★雄治の農場開設を応援する
北垣国道
(1836 - 1916)



鳥取藩士の子で、幕末には勤王の志士として奔走した。明治維新後は、開拓使の役人、高知県令、徳島県令を経て、明治14年(1881)に京都府知事に就任し、琵琶湖疎水工事を完成させた。明治25年(1892)に北海道庁長官に就任すると、築港、運河、鉄道など社会資本を整備し、北海道移民の奨励、寒地稲作の推進にもつとめた。

北垣は土木工事が好きで、日記『塵海』は、田辺朔朗(娘婿)、廣井勇、岡崎文吉など北海道の土木のバイオニアたちとの親交を記している。また、「北村雄治来る、帰国を告ぐ」(沖(神奈川県知事の沖守固)に送書、北村雄治の事)など、雄治の開拓事業に心を寄せていることがうかがえる。

★「北村雄治」の姓から「北村」と命名する

品川弥二郎
(1843 - 1900)



長州藩士の子で、松下村塾に学んだ。明治政府の殖産興業政策を推進し、内務省、農商務省の要職を歴任。ドイツ留学の経験から産業組合論を提唱し、小農・小商業者の保護が持論であった。

栃木県的那須野が原に「品川開墾」を所有していた。ここは明治の元勳や華族が農場をつくった開拓地だが、「品川開墾」は土壌改良やドイツ農村に学んだ信用組合事業を取り入れて小作人の自立を目標としていた。内務大臣として府県知事の北垣や富田とも親交があり、雄治の農場経営にさまざまな指針を与えた。

★雄治と眼に開拓の思想と実践を教える
金原明善
(1832 - 1923)



現・浜松市の名主の家に生れ、暴れ川として知られる天竜川の洪水に苦しみながら、養蚕、植林、牧畜を奨励して村の

振興に努めた。明治維新後、大久保利通(内務卿)の知遇を得て、天竜川の改修工事に奔走した。北海道開拓にも取り組み、明治33年(1900)に金原農場を道南の瀬棚郡目名(今金町鈴岡)に開設し、北垣国道北海道庁長官とも親交があった。

明治37年(1904)、私財を投じて創設した「金原治山治水財団(現在)」が計画した浜名用排水幹線改良事業は、没後の昭和13年(1938)、ようやく着工に至った。

雄治は、小林小太郎(従弟、貴族院議員)に金原を紹介されて親交を結んだ。弟の眼は、兄を継いで農場主となる時、金原を訪ねて教えを乞うた。金原の思想、「実を先にし名を後にす」、行を先にし言を後にす、事業を重んじ身を軽んず」は、眼の生涯そのものである。

明治維新後、甲府城下町の商人や豪農は、東京や横浜に進出して活発な経済活動を行った。この実業家たちが甲州財閥と呼ばれる。一般に財閥とは、同族的支配関係でつくる独占資本(例えば三井財閥、三菱財閥など)を言うが、甲州財閥は、同郷意識を絆とする緩やかな資本連合をつくって協力し合う、地方財閥である。

甲州財閥は、明治中期から昭和初期にかけて、鉄道会社、電力会社、証券金融会社の設立・買収を展開して存在感を増し、政界にも進出した。

北村雄治も甲州財閥の一人で、根津嘉一郎、小池国三、河西豊太郎と親しい交わりがあった。



根津嘉一郎
(1860 - 1949)



雑穀商や質屋業を営む豪商(現・山梨市)の子に生まれる。明治10年代には民権運動に関わるが、東京へ出てからは、若尾逸平や雨宮啓二郎と知り合って甲州財閥を形成する一人となる。根津は、東武鉄道や東京電灯の買収や経営再建に取り組んだほか、有力事業2000余社の創設・経営に携わった。茶人としても知られ、茶具や書画骨董を蒐集した根津美術館をつくった。根津は、北村雄治・暉の兄弟を公私にわたって支え続けた。

小池国三
(1866 - 1923)



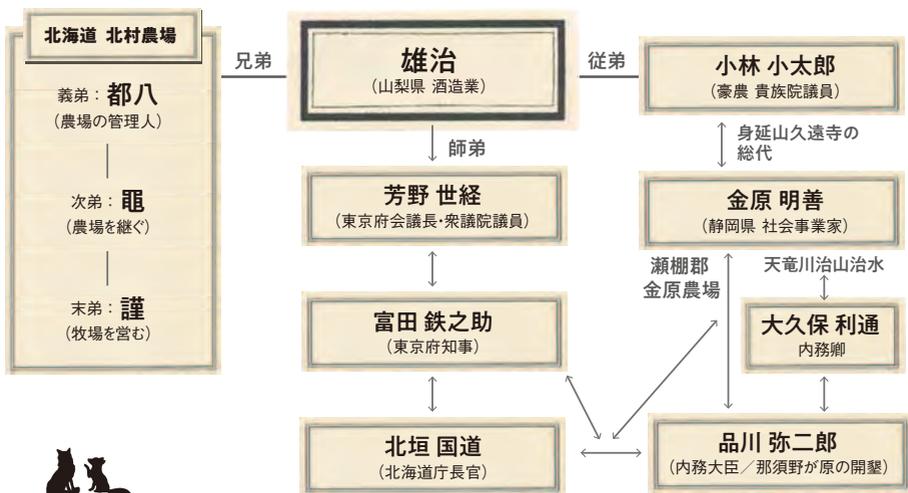
11歳で甲州財閥の巨頭、若尾逸平の両替店に奉公。15歳で番頭に抜擢される。その才覚から独立し、証券取引業「小池国三商店(山一証券の原点)を東京兜町に開業。甲州財閥の一員として活躍した。北村暉は、根津の勧めで、一時小池商店に勤めたことがある。

河西豊太郎
(1874 - 1959)

現・南アルプス市の有力商家の子に生まれ、私塾に学んで上京を望んだが、幼少期に父をしくしてゐるために家業を継いだ。栃木県の那須野が原開拓事業にも携わるが失敗。雄治の誘いで北海道に渡るが、実現には至らなかった。その後、地元山梨県で政界に入り、甲州財閥の一翼を担った。

河西は、年齢、出身地、父亡き後に若くして家を継ぐなど、雄治と共通するところが多い。雄治にとって根津が甲州財閥の先輩なら、同世代の河西は互いに切磋琢磨する友であった。

北村雄治の人脈



村





明治33年、北村誕生 名の由来は「北村雄治」にあり

明治31年（1898）9月の石狩川大洪水は、開墾地の生活を壊滅させるほどの被害を与えました。政府と道庁は、排水路や道路をつくる水害救済工事を行い、被災者の生活を補助しました。狐森、幌達布、美唄達布の地区も大きな被害を被りましたが、岩見沢村の役場から遠くにあるため、後手に回る対応に地元の不満が募りました。それをきっかけとして分村独立の機運が高まり、請願運動の中心になって奔走したのが北村都八（雄治の義弟）でした。

明治33年6月13日、岩見沢村から分かれて「北村と称す」と告示され、

7月1日、北村戸長場が開庁しました。村名の由来は「北村雄治」の名にあります。雄治は、開拓のはじめから北垣国道（北海道庁長官）と親しく、東京では経済界や政界にネットワークを作っていました。なかでも品川弥二郎（明治の元勲、元内務大臣）は、持論の産業組合を学びに訪れた雄治の心意気を讃えて、直筆の書や説教所の寺号を贈っているほど。雄治のもつ人脈は道庁の役人がよく知るところであり、雄治が開いた北村農場がこの地域の開拓を牽引していることも周知の事実だったのです。

明治34年2月25日、下美唄8番地に新築2階建ての北村戸長役場が落成すると、郵便局も隣に移って、ここに市街地が形成されました。初めての総代人は、北村都八と郵便局長の白石武資（しらいし たけすけ）でした。

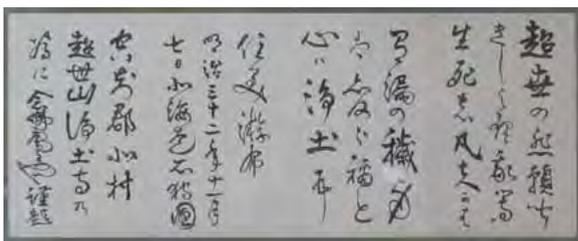


初代戸長役場。北村農場が寄付した餅を撒いて落成を祝った。





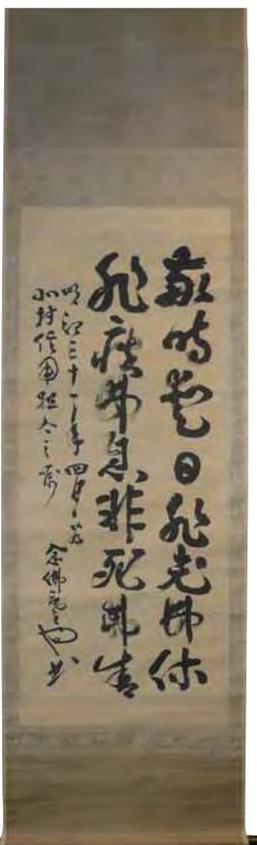
開村当時の行政図。



超世の悲願
聞きしより
凡夫かは
生死も凡夫も
有漏の穢身は変らねど
心は浄土に住み遊ぶ
明治三十二年十一月七日
北海道石狩國空知郡北村
超世山浄土寺の為に
念仏庵やじ謹題

明り呼称
もよ呼称
「北村」
が記されている。

時を敬い日を受す
老いるに非ず休むに非ず
疾(や)むに非ず息(い)こ(う)に非ず
死するに非ず盛んなるに非ず
明治三十一年四月
為北村信用組合の囑 念仏庵やじ書
〈北村信用組合の頼みの為め
品川弥二郎書く〉



明治の元勲・品川弥二郎の書には、分村よりも前の時点で「北村」の呼称が記されています。それは歴史の証言者であり、地域の宝です。

村





5



明治

大正

昭和



平成

令和

兄・雄治の遺志を継ぎ 村づくりに奮闘した北村颯

北村颯^{びん}は、北村雄治の弟として明治9年（1876年）に生まれました。雄治が亡父から継いだ酒造業を手伝い、酒造業廃業後はオーストラリアに渡って羊牧場や港で働きました。雄治の没後、颯は北村農場に移住し、明治43年から4年間で、北村の戸長として村づくりに尽力しました。退職時に4年分の給料を北村小学校の改築費などに寄付したことから、自分の利益は度外視して、地域に尽くす信念がうかがえます。大正3年（1914）、第一次世界大戦が起こると羊毛の輸入が止まり、毛織物が値上がりしました。颯はオーストラリアの羊牧場での経験から、国に綿羊の払下げを働きかけましたが、日本での飼育法が確立していないことから却下されます。そこで颯は自力で綿羊を集めて北村綿羊組合を結成し、まるで犬猫をかわいがるように飼育したところ、品評会で上位を独占する綿羊が育ちました。さらに全国に先駆けて

北村颯(1876~1960)



「羊毛加工講習会」を開き、農閑期にホームスパン製作で収入を得られる技術を広めました。大正13年、日本初の純国産ホームスパンが北村で誕生し、皇室への献上品になるほど優れた作品も作られました。また、羊肉料理の普及のために大正13年、北村綿羊畜産組合が発行したレシピ集にある「羊肉の網焼き」は、ジンギスカンの原型とされ、北村は「ジンギスカン発祥の地」とも言われています。

眼は、牧畜、造田、灌漑用水建設にも積極的に取り組んで、農村の基盤整備を進めました。そして、昭和6年（1931）、北村農場の小作人に農地を解放する決心をします。それは雄治の遺志でもありました。背景にあったのは「自作農になることで、土地を愛し、生産を高め、生活を向上させることができ、郷土を愛することにつながる」との思いです。とはいえ、小作人が土地を購入するのは容易ではありません。眼は、所有する農地の大半を、国が規定した半分以上の価格で譲渡しました。当時、こうした考えを実行した人は稀で、眼の高い見識が表れています。

眼は綿羊飼育、ホームスパン製作、自作農の創設など、利他的な精神で画期的な試みを次々と実行しました。

家(home)で紡ぐ(spun)を語源とするホームスパン。農家が羊毛を染め、糸を紡ぎ、機織り機で布にしたもの。北村の綿羊やホームスパンは多くの品評会で上位を独占した。





デンマーク農法を志向し、 空知地方にホルスタイン種を導入した北村謹

幼くして父を亡くした北村謹^{きん}は、長兄の雄治を親代わりとして成長しました。

札幌農学校へ進学しましたが、病気のため中退。牛の飼育が好きで、大正3年（1914）に分家として独立して北村牧場を開き、デンマーク農法を実践します。デンマーク農法とは、家畜の厩肥を活用して地力を上げて作物を作り、かつ農民自身が協同組合を組織して産業として動かしていくものです。謹は、乳量の多い優良な牛の改良と飼育に取り組み、「空知ホルスタインの父」と慕われました。また、北海道製酪販売組合（後の雪印乳業）の役員として乳製品を広め、酪農義塾（後の酪農学園大学）の理事として後進を育てました。謹の妻・智恵は、元函館区立弥生尋常小学校教諭で石川啄木の同僚でした。啄木が智恵に送った



水害から牛を守ろうと謹が考えた2階建て牛舎（昭和9年撮影）。北村牧場が優れたホルスタイン種の繁殖に貢献し、道内外で飼育農家が増えた。



北村謹(1882～1935)

『一握の砂』の返礼として、智恵からバターが送られてきたエピソードを啄

木は歌に詠み、『悲しき玩具』に収めました。北村牧場跡地に歌碑があります。

石狩の空知郡の 牧場のお嫁さんより送り来し バタかな

一方、同時代の岩見沢に生きた詩人・加藤愛夫は、謹の人となりを『雪どけ』に次のように描きました。

雪どけ 加藤愛夫

(昭和6年(1931)「海図」)
「詩人のいる風景」再掲

朝早くK氏がやって来た

ホームスパンとなめし革の労働服で

夫人の手になる自慢のビスケットを持って来た

氏は、村のブルジョワであり、大牧場主

この頃は世界的名牛を出して有卦に入っている

しかし副業を持たねばやってゆけません

上バター一ポンド五十銭では

牛乳一升一六銭五厘では

氏は人格の高い人であった

思ったことは必ずやり通す意志の人であった

そして謙遜で

さればこそ若い私にもこうして話を持ちかけるのだった

心底から農民生活を語るのだった

つらいものです、何という生れ合わせでしょうか

村の娘は百姓が厭だと言います

氏は輝く顔を上げて笑った

雪やけの大きな顔に陽が照った

氏は都市人の消費について

私は販売及中間商人の暴利について

残るものは汗と苦ばかりですな

農民のあごは乾上りかけています

氏は昼近く帰った

かた雪を踏んでステッキをつき

後姿を見送ると老いて見えた

謹は、後の雪印乳業や酪農学園大学設立に関わり、北海道の酪農の発展に貢献しました。



村





泥炭地に阻まれ、長年月かかった道路交通の整備

石狩川に面した北村は、川が交通手段だったため、道路の整備には長い年月がかかりました。明治20年（1887）に完成した樺戸道路（峰樺道路）は月形と峰延を結び、明治28年には月形と幌向を往来する堤防沿いの樺戸街道（のち沿岸道路）ができました。どちらも北村の外縁を巡る道で、岩見沢村戸長役場へ行くには、歩いて幌向に出て、汽車に乗りました。

明治31年、日野農場が私費で千間道路をつくり、岩見沢道路が水害救済工事によって完成しました。二つの交差点（赤川、現農協GS）は泥炭地の真ん中で、水没して使えないことも。岩見沢道路は東側に並行してもう一本つくられました。赤川交差点の手前で工事が中断し、斜め道路は大正11年（1922）にやっと完成しました。

泥炭の軟弱地盤には悩まされ続けました。道路改修に必要な砂利や真土を採取できない北村は、他から高額で買わなければならず、昭和になっても主要道路の維持で精一杯。原野の開拓道路は戦後の「新道路法」を待たねばなりません。中央バスが走るのには開村から50年以上も後でした。

道路の整備、維持においても、泥炭の軟弱地盤の克服が課題でした。



昭和32年頃、北村を走った中央バス。待ちに待った公共交通機関の誕生である。



農をおこす

信じられないかもしれませんが、

北村の全面積の77%は、農業に不向きな泥炭地でした。

重機のない昔、手掘りの排水溝で泥炭から水を抜き、

客土し、灌漑用水を引いて、

やっと作物が育つ農地になりました。

北村の土の一粒一粒は、人々の汗と思いが作り上げたものなのです。





1



江戸

明治

大正

昭和

平成

令和



①排水のための管を1本1本、埋設する人々。写真は重機による開削だが、排水溝は長い間、手掘りだった。②開拓期から昭和40年代まで行われていた、馬櫓(ばそり)による客土。③線路を引いて行われた軌道客土。昭和20年撮影。

全面積の77%が泥炭地 マイナスを克服し、実りの大地に

明治時代半ば、移住者が増えてくるにつれ、北海道庁は殖民地を選定して区画を行いました。殖民地とは開墾予定地のことです。しかし北村はその対象外でした。なぜなら、北村の77%が、農作物の生育に適さない泥炭地だったからです。

泥炭とは、気温が低く微生物の働きが不活発なために植物が完全に分解されず、できた土のこと。強酸性で無機成分が乏しく、スポンジのように水分を含んだ軟弱地盤です。植物の繊維が絡み合っているため、馬1頭ではとても耕せず、2頭引きでようやくできたほどでした。田の代掻きでは、馬の脚がずぶずぶと沈んでいくので、草鞋ぞうりを履かせたといえます。

しかし人々は、泥炭地を農地に変えるため、不断の努力を続けました。まず、排水溝を掘って土中から水を抜き、地下水位を下げ、土地を乾かしました。重機のない時代、その多くは手掘りでした。掘った溝が地表に見えているのが明渠めいけい、排水管などが土中に埋められているのが暗渠あんきょです。北村に限らず、北海道は泥炭地が多いので、農地の地下には、排水のための管が張り巡らされています。

排水の次は、客土です。昭和22年(1947)から客土事業が始まりました。



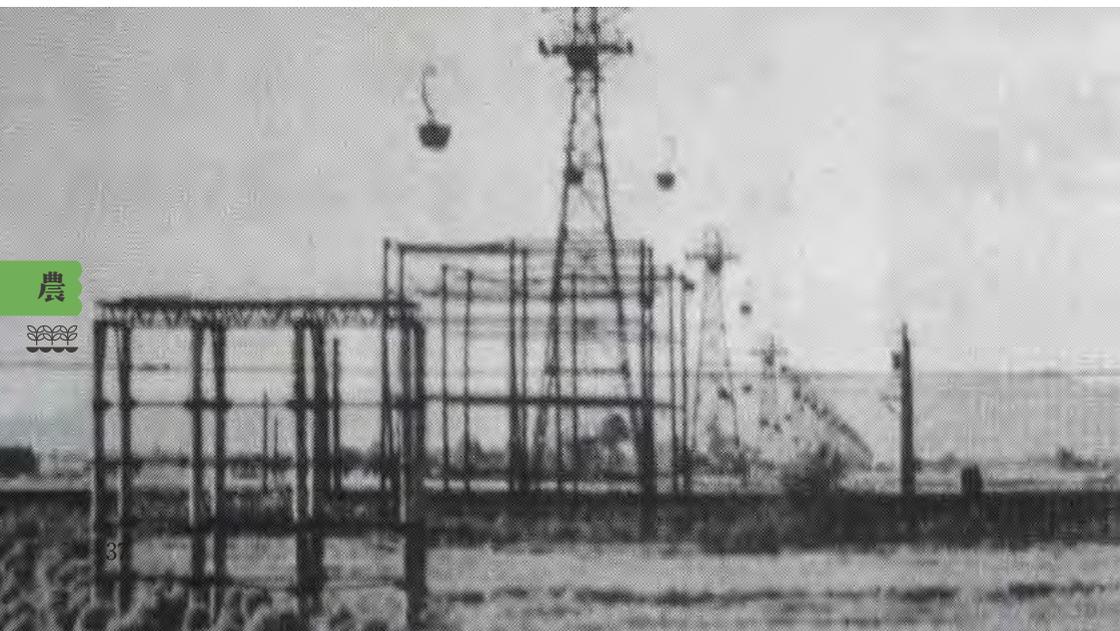
山などの土を泥炭地に入れ、農作物が育つような土質に改良するのです。膨大な量の土が、さまざまな方法で運搬されました。馬が運ぶ馬搬客土、レール（軌道）を敷いてトロツコで運ぶ軌道客土、台箱を載せたバチ櫛そりをブルドーザーで牽引して運ぶバチ客土、スキー場のリフトのような索道さくどうによって空中を運ぶ索道客土、水を加えて泥状にしてパイプで送る送泥客土……。時代が下るとトラック客土も登場しました。客土は土質を飛躍的に向上させ、豊かな実りをもたらしました。客土前は黒っぽかった稲が、客土を施した田では黄金色に変わったそうです。

「一に排水、二に客土」を旗印に、気が遠くなるほどの苦労を重ねて、泥炭地は変貌しました。北村では、土の一粒一粒に人の汗がしみ込んでいます。

今、北村に広がる田畑は、先人が泥炭地と格闘して農地に作り上げたものです。その方法は「1に排水、2に客土」でした。

写真はすべて『曠野に立ちて 北村土地改良史』(平成16年、空知郡北村発行)より。

夕張山地の山土を圃場に客土するために途中の函館本線と国道12号をまたぐ必要があり、空中に索道が設置された。日本唯一の架空索道客土の風景だ。昭和30年完成したが安全対策のため本格稼働は35年。約10年で約1300haに客土を施した。





2



明治

大正

昭和

平成

令和



開拓者たちの「米を作りたい」という強い思い 稲は、水害に強い作物でもあった

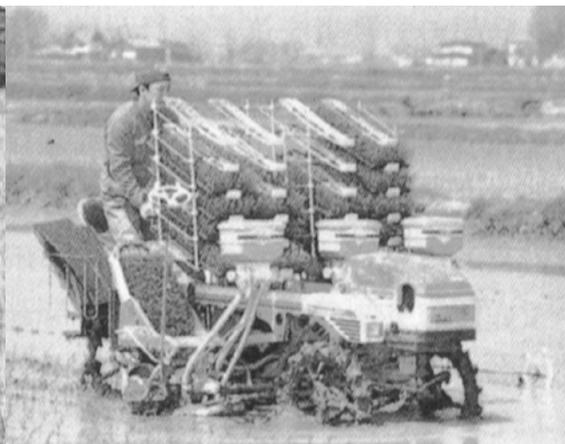
近年、北海道で「ゆめぴりか」や「ななつぼし」といった特A評価のおいしいお米が続々と登場しています。とりわけ北村がある空知地方は北海道最大の産地。しかし一朝一夕に米どころとなれたわけではありません。

明治時代初期、お雇い外国人のホールレス・ケプロンやウィリアム・クラーク（札幌農学校教頭）の「寒冷な北海道に稲作は向かない」との見解に従い、畑作中心の開拓が進められました。しかし、開拓者として移住してきた農民には「米を作りたい」という強い思いがありました。明治6年（1873）、中山久蔵が島松（現・北広島市）で、道南から取り寄せた赤毛種の栽培に成功したことは、空知でも米作りができる希望につながりました。

北村における稲作の始まりは、明治31年（1898）のこと。美唄達布の石塚五右衛門は中ノ沼から水を引いて、高岡嘉平も沼の水を使って、翌年、収穫を得ました。値段の上下が激しい畑作物と違って、米の価格は高く安定していましたし、何より、水害に苦しむ人々にとって、水に浸かっても持ちこたえられる稲は非常にありがたい作物だったのです。



昭和初期の田の草取りの様子。「曠野に立ちて 北村土地改良史」（平成16年、空知郡北村発行）より。



高度経済成長に伴い、労働力が工業など他の産業に吸収されるようになり、農業労働力不足と経営農地の拡大によって、高度な農業機械が求められるようになった。(右)昭和50年代初めから普及した乗用田植え機による田植作業、(左)昭和40年代後半から普及した自脱型コンバインによる収穫作業。

北村農場を開いた北村雄治も、明治35年、鏡沼のほとりに蒸気機関を動力とする米国製の揚水機を据え付け、80町歩の造田を行いました。その費用は現在の貨幣価値で数千万円に相当します。『北村百年史』によると、機械力による揚水で水田耕作を試みたのは日本初だとか！ けれども不運なことに凶作で多額の損害を被り、雄治の死後、北村農場を継いだ弟の北村暉は、水田耕作を中止しました。

その後、技術の進歩で寒地稲作への不安が薄れるにつれ、大規模な灌漑溝で農業用水を引いて水田を開こうという機運が高まりました。大正7年の米騒動で米増産が叫ばれたこともあり、暉は稲作に再挑戦しようと石狩川から揚水する300町歩の造田計画を立てましたが、石狩川左岸を広く潤す灌漑溝計画に参加することに。これが、東洋最大の規模とシステムと称賛される北海土功組合へとつながっていきます。

北村における稲作の始まりは明治31年。北村農場では、日本初とされる米国製揚水機による機械揚水が行われました。





3



明治

大正

昭和

平成

令和

米作りに必須の水を、どう得るか 空知を潤す水路ができるまで

お茶碗一杯のご飯に相当する米を栽培するのに必要な水の量を知っていますか？なんと、2ℓペットボトルで約1000本分！大量の水を賄うには、川から水を取り入れる頭首工や水路など、水を司るための大規模な設備が欠かせません。こうした施設を管理するのが土地改良区です。

明治35年（1902）、政府は米の増産と移住者の定着のため、北海道土功組合法を制定し、農業設備を整備するための融資を受けやすくしました。大正11年（1922）に北海道土功組合（現・北海道土地改良区）が設立。岩見沢町・砂川村・沼貝村・三笠山村・栗沢村・幌向村・北村の有志によるものです。構想、規模、シテムにおいて、東洋一と称された北海道土功組合の目的は、空知川の水で1万町歩を、石狩川の水で1100町歩を灌漑すること。関東大震災と重なり、資金調達では官民ともにたいへんな苦勞をします。理事による饗応問題が起き、清廉な北村毘が理事就任を



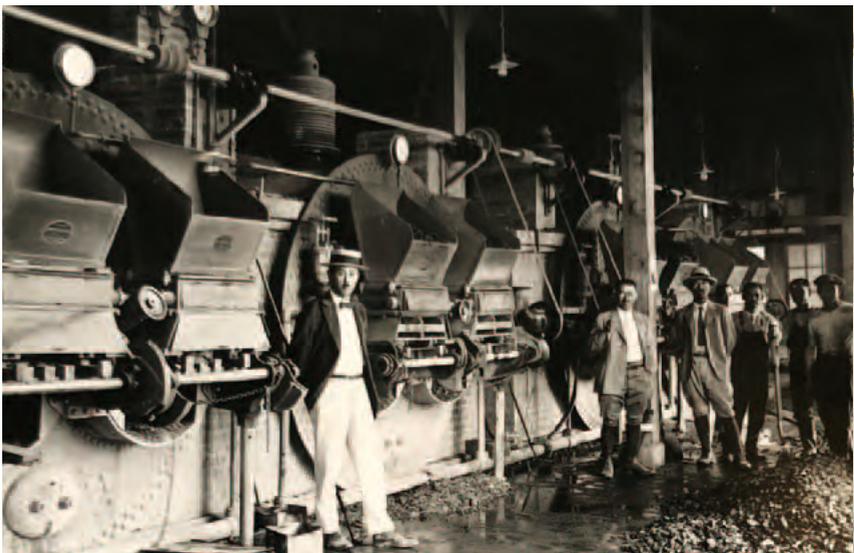
請われますが、暉は報酬の辞退のみならず、陳情のための東京への旅費も交際費も自己負担し、銀行融資の個人保証には自分の全財産をあてると宣言。綿羊飼育やホームスパン製造を事業化した暉の実行力が信用され、資金調達が完了しました。

昭和4年（1929）、空知川からの水を導く幹線水路「北海道灌漑溝（現・北海道幹線用水路）」が完成。赤平市で取水し、砂川市、奈井江町、美唄市、三笠市、岩見沢市、栗沢町、南幌町まで約80km、農業専用の用水路としては日本最長です。

幹線から離れた北村は、石狩川の河畔に昭和3年、北村揚水機場を建設して石狩川の水を揚水し、灌漑を行いました。

大正時代に行われた道庁による調査で、北村は、泥炭地ゆえ米作りに適さないと用水路の対象地区から外されていました。しかし暉の尽力は大きく、北海道功組合史に「創立以来の貢献者 理事 北村暉」と、讃えられています。

昭和4年にできた北海道灌漑溝（現・北海道幹線用水路）は、日本一の長さ。空知の米作りを躍進させました。北村では北村揚水機場を設置し、石狩川からの取水によって水田を灌漑しました。



石狩川の水を灌漑に使うための北村揚水機場取水口（右）と、揚水機を動かす蒸気機関（左）。当初、蒸気機関の燃料は石炭を使ったが、余剰電力を安く利用できる電力に転換。その際、暉は農家が利用できるよう電力会社に働きかけ、北村地域に初めて電灯がついた。





4



明治

大正

昭和

平成

令和

低コストの農業経営を実現するために、 水田を近代的に整備

昭和30年代、北村は、先人が夢見た豊かな稲作地帯となりました。ところが、昭和40年代の「米離れ」で、労働生産性の向上・省力化による低コストの農業経営が求められるようになります。その切り札となる高性能の大型農業機械を導入するには、水田を近代的に整備することが必要でした。水田区画を大型化し、湿田を乾田化して大型の農業機械を使いやすくなるのです。その際、1本の水路で用水と排水を兼ねていたこれまでの方式を見直し、用水路と排水路を分離して、それぞれの水路の機能をアップさせるとともに、大型の農業機械が通行しやすい農道も整備されました。

当時、泥炭地水田を大型化する手法として、北村農協、空知支庁、道立中央農業試験場が協力して取り組んだ「置土方式」（別名を北村方式という）は、「泥炭地にあってもこの方式であれば大丈夫である」と農林省（当時）から認められました。これは、なるべく表土を削らないで、低い所に客土をして平らにならすという方法です。

こうした水田の近代化は、道営圃場整備事業として、昭和41年（1966）、北栄地区から始まり、昭和63年に完了しました。地区ごとに建立された記念碑は、大事業に取り組んだ農家の誇りを伝えています。

水田の近代化は大型の農業機械の導入を可能にし、コストの低減につながりました。地域の記念碑は、こうした取り組みを今に伝えています。



「豊かな農郷」碑



5地区合同「農魂興郷」碑



道営ほ場整備事業

「水清く緑豊かに人好み
瑞穂輝く大富の里」碑



「竣工記念」碑

道営ほ場整備事業		
No.	地区名	工期
1	北栄	S41～S48
2	中小屋第1	S54～S62
3	中小屋第2	S54～S62
4	大富	S50～S63
5	大富南	S55～S61
6	北村中央	S50～S58
7	美唄津布	S51～S60
8	赤川	S52～S63
9	赤川2期	S53～S62
10	北村有明	S52～S63
11	幌津布南	S54～S62
12	幌津布北	S55～S62
13	砂浜西	S53～S62



「拓魂農興」碑



「頌土農興」碑



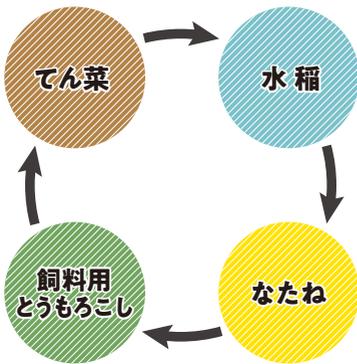
連作障害を防ぎ、土壌を豊かにする「空知型輪作」りんさく

畑で同じ作物を続けて作ると、地力が落ちて収量が減ったり、病気にかかりやすくなったりします。これを連作障害といいます。畑作中心の十勝地方では、連作障害を防ぐために、小麦・てん菜・馬鈴薯・豆類を順繰りに栽培する4年輪作体系が確立しています。

米どころ空知でも転作した圃場で、昭和60年頃から小麦や大豆を生産してきました。特に小麦は、労働時間が少なく収益性が高いため、連作になりがちで、連作障害が問題になりました。

そこで平成15年(2003)、水稲の乾田直播かんてんちくば(※)を輪作体系に導入するという、画期的な「空知型輪作」が始まりました。つまり、畑から水田へ、水田から畑へと年ごとに形態が変わるのです。もちろんきちんとした準備が必要で、水田から畑への転換時には、水はけを良くする排水対策が不可欠です。一方、畑から水田への転換時には、水漏れ対策が重要です。田を取り囲んでいる畦に田の土を塗りつけて割れ目や穴を塞ぎます。そして均一に水を張るために、レーザー均平機で地面の水平を保ちます。

「空知型輪作」の効果は、連作障害の回避だけではありません。



「空知型輪作」の一例

(※) 苗代で育てた稲の苗を水田に植えるのではなく、畑状態の田(乾田)に、直に種もみを播く(直播)こと。苗立ちした後に水を入れる。





初夏の北村。なたねの黄色が印象的な田園風景に、「空知型輪作」の知恵が生きている。

圃場を水田にして水を張ることで、病虫害や雑草が一扫されるクリーンング効果があることがわかりました。

さらに、なたね、飼料用とうもろこし、てん菜など、新規の畑作物も導入しました。これが目を見張るほどの効果を生んでいます。なたね自体、収益性の高い作物ですし、なたねを作ると土がほこほこして水はげがよくなりました。飼料用とうもろこしは根を地中深く伸ばして土の透水性・排水性を向上させ、畑にすき込んだ茎葉は豊かな土壌を作ってくれます。てん菜の茎葉は土壌の微生物活性を高め、後作あし作の収量がアップしました。こうした多品目の作付けによって、気象災害などのリスクも分散できます。作業時期の異なる作物を組み合わせることで、過重な労働を避けることにもつながっています。

米どころ空知ならではの「空知型輪作」は、多彩な作物を安定して収穫できる水田を作り上げ、多くの実りをもたらし、働き方をも変える画期的な方式です。





6



明治

大正

昭和

平成

令和

落花生、白菜、シヨウガ、バジル…… 北村の元気を生み出す野菜たち

北村は北海道における米の一大生産地ですが、昭和40年代に米の生産調整が始まりました。転作作物として小麦や大豆・小豆、白菜、キャベツなどが栽培されるようになり、白菜は全道一の生産量となりました。さらに「空知型輪作体系」が確立し、水稲が直播されるようになって不要になった育苗ハウスを活用して落花生、イチゴ、シヨウガ、加工用トマト、バジルなど、野菜の種類が増えていきました。高温を好むため北海道には適さないとされてきた落花生ですが、空知農業改良普及センターとの連携のもと、一般的な実の1・5倍もある大粒の品種「おおまさり」の栽培ができるようになり、生産農家が増えました。真空パックの塩ゆで落花生は岩見沢市の特産品として評判を呼んでいます。落花生料理のレシピ集も人気で、落花生の炊き込みご飯は格別の味わい。落花生をベースにしたバジルソースも商品化



落花生は、花の後、めしべの子房の根元が下向きに伸びて土にささり、土中で子房が膨らんで落花生が実る。花が落ちて実がなるように見えることが、名前の由来。

元気に育つバジル。落花生とのコラボでジェノベーゼソースに。



漬物、味噌、麴、塩ゆで落花生など、六次産業化が進む。





フットパスとは「歩く小径」の意味でイギリス発祥。田園風景が身体も心もリフレッシュしてくれる(右)。農家による畑での解説もあるのが北村流フットパス(左)。

されており、家庭で手軽にイタリアンレストランの味が楽しめます。味噌や漬物づくりも盛んで「北村のかあさんたちの手作り」がブランドとして定着しています。農産物を加工・販売する六次産業化は、生産者と消費者を近づけてくれるのです。

多種多様な野菜づくりは、新たな活動も生み出しました。美しい田園風景を眺めながらゆったり歩き、ゴールで地元野菜たっぷりのサラダを味わうフットパス、こだわりの漬物名人が講師を務める漬物ツアー、北村に精通する野菜ソムリエが主宰する畑ツアーと落花生ランチ交流、収穫体験を通して農の大切さに触れる食育講座などなど。交流は、人と人とのつながりを確かなものとし、地域の元気を育んでいます。

多種多様な野菜とその六次産業化、フットパス、ユニークなツアー、そして食育へ。バリエーション豊かな活動が、地域を元気にしています。

農



「源泉掛け流し43度の湯」で知られる北村温泉ホテル。令和3年にリニューアルオープンし、女性専用休憩室、車椅子対応客室が設けられた。地元産食材を使った食事も人気。



T

-KITAMURA-

里地という 宇宙に 抱かれて



豊かな自然が育まれています。

春、雪解け後の田んぼにはコハクチョウやマガンが群れをなし、豊正神社にはエゾエンゴサクとニリンソウのお花畑が広がります。農地ではヒバリがさえずり、ノビタキやアリスイなど草原や疎林に生息する小鳥も賑やかです。河川敷ではエゾタヌキがのそのそと歩き回り、水たまりにはエゾアカガエルやエゾサンショウウオが産卵。ズビヤーク、ズビヤーク、ザザザザ……と派手なディスプレイフライトをしているのは、オーストラリアからの渡り鳥、オオジシギです。

四季折々の自然が感じられる辺り一帯は、環境省の「生物多様性保全上重要な里地里山」にも選定されています。特徴的なのは、かつての原野の名残である数々の沼です。中でも北村家によって守られてきた鏡沼は、北海道の環境緑地保護地区にも指定されており、良好な自然環境が保たれています。岸边にはオオバナノエンレイソウ、オオウバユリ、オオバタチツボスミレ、キツリフネなどが咲き、かつての自然堤防の縁の湿地林としての原風景が残されています。水中には他では見られなくなったクロモ、

文・写真 / 牛山克巳(宮島沼水鳥・湿地センター)



A



B



C



D



E



G F





Q



R S



P



PO



N

M



M



L

K



センニンモなどの沈水植物が奇跡的に残されており、コオイムシやゲンゴロウなどの希少な水生昆虫も生息しています。

三角沼はかつての原野の中心部に位置した沼で、やはり良好な環境が保たれています。ホッカイコウホネが咲く夏には湿原の池塘としての原風景を感じることができ、アカエリカイツブリなど希少な動植物も多く見られます。

付近にはかつての原野の沼として宮島沼や手形沼も残されていますが、富栄養化や浅底化など環境の悪化が深刻です。蓴菜沼では、ジュンサイはもちろん、ツルコケモモ、モウセンゴケ、ヒメシヤクナゲ、ホロムイリンドウなどが見られた記録がありますが、今では絶滅しており、丸沼、月沼、蛇沼、親子沼など消えてしまった沼もあります。

かつての北村にはイトウやチョウザメ、カワウソも生息していました。コスコスガサガサと鳴く「ねこさがし」や、牛のように鳴く「やちべこ」と呼ばれる生き物もいたといいますが、既に絶滅してしまったのでしょう。今となつてはその正体を確かめることもできませんが、鏡沼や三角沼のほとりで耳をすませば、もしかしたらその声を聴くことができるかもしれません。

A オオハクチョウ、B 三角沼、C ザゼンソウ、D エゾサンショウウオ、E キタキツネ、F ホッカイコウホネ、G ノシメトシボ、H カンムリカイツブリ、I コオイムシ、J モウセンゴケ、K 鏡沼、L エゾユキウサギ、M タンチョウ、N エゾヤチネズミ、O サワギキョウ、P コハクチョウ、Q ナツアカネ、R カキツバタ、S エゾエンゴサク、T マガン



H



J



